

両大戦間期アメリカの優生学運動と 「ふさわしい家族」コンテスト

小 倉 恵 実

要 約

両大戦間期のアメリカでは、優生学運動が大衆化の様相を見せた。「赤ちゃんコンクール」や続く「ふさわしい家族」コンテストは、それを表す典型的なイベントで、アメリカ各州や郡の博覧会で頻繁に開かれ新聞でも第一面で大々的に報道された。科学の発達により、より視覚的で「わかりやすい」展示物を生産することが可能になったことも挙げられるが、このコンテストを支えていたのは、地方の女性達であり、彼女たちは優生学運動に参加することで自らのアイデンティティを獲得していったのである。

キーワード：両大戦間期アメリカ文化史、優生学運動、「赤ちゃんコンクール」、
「ふさわしい家族」コンテスト、進歩主義時代

1. はじめに

「優生学」と言えば真っ先に思い浮かべるのはナチス・ドイツが第二次世界大戦中に行ったホロコーストという人は多いのではないか。「優生学 (Eugenics)」という言葉はイギリスの人類学者であるフランシス・ゴルトンによって1883年に創り出された造語である。チャールズ・ダーウィンのいところでもあったゴルトンは、著書である『人間の能力とその発達の研究』の中で、Eugenicsとはギリシャ語で「良い種」を意味し、人間の中の優良な血統を維持・増加させるための学問であると説明している。1912年にはロンドンで第一回国際優生学会議が開かれ、数百の知識人が集結したことを考えると、優生学は初期段階においては、ヨーロッパで広く持て囃される学問だったと考えることも可能であろう。

しかし、この時期あらゆるヨーロッパの国々を差し置いて、最も熱狂的に優生学に飛び付いたのはアメリカ合衆国だった。この時期のアメリカは、進歩主義時代 (Progressive Era) と呼ばれ、人類の進歩に向けた社会改革や社会運動が盛んであり、科学は進歩主義に理論的基盤を与えるものと位置づけられた。ヨーロッパの先進的な学問を輸入する中で、注目すべき動きとして、生物学と社会運動とを結びつける社会ダーウィニズムや優生学が「アメリカにとって進歩をもたらす学問」と肯定的に評価されたことが挙げられる。

本論では、アメリカ全土に広まった優生学運動の中でも「ふさわしい家族」コンテスト (Fitter Family Contests) に注目し、その運動がどのような人物によって広められ、研究者だけでなく一般大衆にどのように浸透していったかを俯瞰していく。

2. 積極的優生学と拒否的優生学

進歩主義時代の優生学運動を論じる際に、この運動には、二つの側面があることを捉えておかななくてはならない。この二分法は、筆者が詳論を試みるアメリカの事例以外にも、イギリスやフランス、ドイツ、スペインなどの西ヨーロッパ各国、デンマークやノルウェーなどの北ヨーロッパ各国、及びブラジルなどの南米にも該当する¹⁾。

一つは「積極的優生学 (Positive Eugenics)」と呼ばれるもので、これは当時の知識人層及び社会的支配階層に多かった白人種、中でもアングロ＝サクソン系や北方系 (Nordics) の人種の「優秀性」に注目し、「より進歩的で優秀な人間を増やし、社会を向上させるためには何が必要か」を様々な社会運動の中で取り組んでいく。この種の優生学には、主に「人種改良」を目的とした学校教育や後述する「赤ちゃんコンクール」、そして「ふさわしい家族」コンテストなどが挙げられる。ここで注目すべき点は、人種改良や優生学を学校教育に組み入れる動きは北及び西ヨーロッパ各国及び両アメリカ大陸各国で見られるが、「赤ちゃんコンクール」や「ふさわしい家族」コンテストは、アメリカ合衆国でのみ見られた社会運動だったという事実である。つまり「ふさわしい家族」コンテストを通して、他の国には無い、アメリカ独自の優生学の動向を把握することが可能なのではないか。

もう一つは「拒否的優生学 (Negative Eugenics)」²⁾と呼ばれるもので、主にアングロ＝サクソン系の人々が、自らの「優秀な人種」の純血性を守るために「劣等な人種」もしくは「劣等な心性を持つ人間」の隔離及び断種を実行する。章1で触れたナチス・ドイツのホロコーストなどはその典型で、ユダヤ人だけでなく、精神疾患患者や身体障害者・同性愛者なども「劣等種」として判断され、断種・隔離 (時によっては抹殺) された。これは彼らが「優秀な人種の育成にとって大きな障害となるから」に他ならない。ユダヤ人虐殺に隠れた格好になってしまっているが、後者に該当する人々に対する断種を代表とする「優生学的処置」は、拒否的優生学の根幹を成すものであり、第二次世界大戦後も上述した各国で問題視はされなかった³⁾。

アメリカ合衆国においても、断種は、1950年代～60年代にかけて、第二次世界大戦前と変わらず盛んに行われ、対象となったのは知的障害者や福祉受給者だった⁴⁾。1978年に保健教育福祉省 (HEW: Department of Health, Education and Welfare) が最終断種ガイドラインを発表し、刑務所や精神病院の被収容者に対するインフォームド・コンセント無しの断種及び断種目的の子宮摘出術が禁止されるまで、断種は人権侵害ではなく優性保護と捉えられていた側面があることは否定できない⁵⁾。

優生学には大別してこれら二つの性質のものがあるが、本論では、一つ目の「積極的優生学」に限定して考察を進めることとする。

3. 「赤ちゃんコンクール」

進歩主義時代とは1890年代～1920年代を一般に指すことが多い⁶⁾。進歩主義時代のアメリカにおいては、「全ての運動は人類及び社会の進歩に寄与するべきだ」とのスローガンのもと、禁酒運動や女性参政権運動などを代表とする様々な社会運動が全米で繰り広げられた。

進歩主義時代において、重要視されたのは科学技術の社会活動への応用だった。全米を網羅する鉄道の整備によって、鉄道業のみならず、鉄鋼業界や輸送業界は飛躍的に発展した。彼らの求めたのは効率性であり、フレデリック・テイラーの「科学的管理法」は、科学的実験から得られたデータを経営に反映するという、まさに進歩主義時代を代表する思考様式であった。

衛生学、公衆衛生といった科学的知見は、各家庭の子育ての現場にも応用され、「幼児に対するより良い世話や食事は、家畜にも見られるように、より健康な子供を生み出す⁷⁾」という考え方が、当時社会的な発言権を得るようになっていた白人中産階級に広く行き渡った。こうした公衆健康プログラムは、「より良い赤ちゃん運動 (the better babies movement)」となり、子供を育てる親、特に母親に優秀な子供を育てる義務があると喧伝した。

当時の積極的優生学で重要視されていたのは、1900年に起こった「メンデル説の再発見」だった⁸⁾。これは、妻と夫のどちらかが精神障害や精神薄弱である場合、その夫婦から生まれる子供には一定の割合で精神障害や精神薄弱が遺伝形質として出現するという「学説」である。これらの精神障害を防ぐためには、妻及び母となる女性は、良い生殖質 (germ plasm) を持つ男性との結婚を奨励し、また自らも良い生殖質を子供に与えねばならない義務を背負った。

ここで登場したのが「赤ちゃんコンクール (Better Babies Contest)」である。このコンクールの対象は主に中産階級以上の白人家庭の乳児ないし幼児であり、審査基準は、赤ちゃんの見た目の美しさではなく、健康状態や発育状態の良さ (=赤ちゃんの強さ) や知性だった。「赤ちゃんコンクール」が全米で最初に行われたのは1908年のルイジアナ州博覧会であり、主催者は州の女性市民運動家であるフランク・メアリー・デ・ガルモ (Frank Mary de Garmo, 1865-1953) だった。彼女はこの「赤ちゃんコンクール」のノウハウをアイオワ州のPTA指導者であったメアリー・T・ワッツ (Mary T. Watts, d.1926) に伝授し、ワッツは1911年のアイオワ州博覧会で「赤ちゃんコンクール」を児童福祉の専門家であるフローレンス・ブラウン・シェルボーン (Dr. Florence Brown Sherborn, b.1869) と共に開催した⁹⁾。

1913年3月には、デ・ガルモの影響を受けた *Women's Home Companion* 誌 (当時の大衆女性誌) の編集主筆であった、医師リディア・アレン・デ・ヴィルビス (Lydia Allen De Vilbiss, 1882-1964) 達が「赤ちゃん事務局 (Better Babies Bureau)」を設立し、「赤ちゃんコンクール」の企画・開催・広報事務などを請け負った^{10) 11)}。

ここでデ・ヴィルビスの経歴を簡単に俯瞰しておく、彼女はインディアナ州アレン郡に生まれ、インディアナポリスにあるパデュー大学協賛のインディアナ医科大学を1907年に卒業

し、ニューヨーク大学とペンシルヴェニア大学で外科手術訓練を受けた後の1910年に医学博士号を取得している。学位取得後はオハイオ州で5年間医師として勤務している¹²⁾。デ・ヴィルビスが「赤ちゃん事務局」の設立者となったのはこの時期である。

また、アメリカ西部でも、同時期に「赤ちゃんコンクール」の成立と発展が見られる。1910年9月には、コロラド州デンヴァーの著名な市民グループが優生学クラブを立ち上げ、コロラド州北部のグリーリーの地元新聞は、中西部の優生学者を招いての定例会議が地方の教会で日曜日の夕方に夕方礼拝の代わりに行われたことを報道している¹³⁾。また1913年、デンヴァーでは、既にカンザスやミズーリのような州ですでに広く行われていた「赤ちゃんコンクール」がメアリー・E・ベイツ (Mary E. Bates, 1861-1920) によって開かれた。デンヴァーの地元紙は、このコンクールは遺伝とよりよい子供の育成環境の重要性をデンヴァーのみならず、コロラド州全域の大衆に知らしめる意義がある、と次のようなトップページの見出し文句で大衆の興味を惹くように報じている。

何百人もの人々が
大ニュースとなったコンクールで
赤ちゃんが評価されるのを目撃して
います！ (審査のため—引用者注) 缶詰めにされた
赤ちゃんが不思議そうに大きく目を開けて
母親にしがみついています！¹⁴⁾

ハリー・ブルイニウス (Harry Bruinius) は、これらのデンヴァー及びコロラド州各地の事例から、「これは多くの進歩主義を奉じる人々がデンヴァーを東海岸の大都市に匹敵する、アメリカの『中心部』(heartland)における近代的でコスモポリタンの中心都市にしようと望んだ、高揚した野心的な計画だった」と分析している¹⁵⁾。

ここで特筆すべき点は、二つある。一つは、「赤ちゃんコンクール」というイベントを「発明」したのも、またこのイベントを最初に開催したのも、そしてこのイベントの全米各地での開催に関してノウハウを伝授したのも、全て女性という点である。

もう一つは、「赤ちゃんコンクール」が開かれた場所は「アメリカ文化の中心地」とされていた北東部ではなく、ルイジアナ、インディアナ、アイオワ、コロラドといった、所謂「地方」に属する地域であるという点である。

最初の点については、進歩主義時代の「理想的な女性像」との関わりが考えられる。それまでの女性像は「家父長制を支える貞淑な妻」で家父長である夫や父に従うことが理想とされていた。しかし、進歩主義時代に至ると、急速な科学技術の発展により、女性も様々な情報に触れる機会が急増した。彼女たちは、それらの情報を元に積極的に社会運動に参加し、社会の進歩のための歯車の一つとなることが、理想的な女性であると考えられるようになった。勿論、現在のような男女同権には至らないまでも、特に女性が社会に対して大きく貢献できると考えられた出産や育児に関しては、進歩主義時代を支えた女性たちは、家庭という枠を飛び出し、

アメリカ社会全体の「進歩」のために、自分たちが貢献できる重要な手がかりを得たと考えるのが妥当だろう。

次の点については、丁度進歩主義時代にアメリカ大陸横断鉄道など、全米を網羅する鉄道網が完成したことと深く繋がりがあがる。鉄道の完成により、各地域間の情報はそれまでとは考えられない位の速さで交換されるようになった。また、「地方」では畜産が盛んであり、彼らは職業上、優良種同士の交配によって「良い家畜」が作出できることを知っていた。よって「より良い人間の作出」は、彼らにはそれほど突飛な発想には思われなかったのではないだろうか。これが「赤ちゃんコンクール」が地方で盛んに行われた一因であろう。

4. 両大戦間期と「ふさわしい家族」コンテスト

第一次世界大戦の勃発とアメリカの参戦によって、「戦争に打ち勝つことのできる超人類 (Superman)」が今や喫緊の課題として求められているという考え方が、アメリカの中流階級以上の白人の間に浸透していった。「赤ちゃんコンクール」は大戦中もアメリカ各地で行われ続けた。

大戦前、カーネギー財団がニューヨーク州に1898年に設立したコールド・スプリング・ハーバー研究所 (CSHL: The Cold Spring Harbor Laboratory) の中に、優生学記録局 (ERO: The Eugenic Record Office) が優生学者のチャールズ・ダヴェンポート (Charles Benedict Davenport, 1866-1944) によって1910年に設けられた。ダヴェンポートは、1911年の最初の「赤ちゃんコンクール」が全国的に注目を集めたことを受けて、発案者であるメアリー・T・ワッツに向けて「赤ん坊に点数をつけ始める前に (親からの一引用者注) 遺伝に対して50%の比重を置かねばなりません」と葉書に書いて送った¹⁶⁾。この「優生学の権威」からの助言を受けて、ワッツは「より良い子供を生み出すためにはより良い家族の存在をもコンクールに含むことが必要である」と、「赤ちゃんコンクール」から「ふさわしい家族」コンテストに規模を拡大することを主張した¹⁷⁾。

アメリカ社会にとって「より良い人間」を求める動きは大戦後も続き、また、ワッツの「子供から家族へ」という考え方は、「赤ちゃんコンクール」を共催したシェルボーン理解も得ることができた。そして、1920年のカンザス自由博覧会 (Kansas Free Fair) において、ワッツとシェルボーンは、最初の「ふさわしい家族」コンテストとなった「未来の家庭のためのよりふさわしい家族コンテスト (Fitter Families for Future Firesides Contest)」(以下、「第一回『ふさわしい家族』コンテスト」と略一引用者注) を開催した。

第一回「ふさわしい家族」コンテストは、家族の健康の向上と銘打って、アメリカの農村部に優生学的な人間改良のメッセージを届けることに主眼が置かれていた。第一回コンテストにおいて、「ふさわしい家族」の基準となったのは、応募した家族全員の定期検診記録や、家族

の歴史、医学、内科学、歯学、精神医学の専門家による判定であった¹⁸⁾。

この審査基準はアメリカ国内で回数を重ねる毎に複雑化し、また応募部門も小家族部門（子供の数1人）、中家族部門（子供の数2～4人）、大家族部門（子供の数5人以上）、カップル部門、独身男性部門、独身女性部門、男児部門、女児部門と細分化されることとなった^{19) 20)}。

この「ふさわしい家族」コンテストの草創期を担ったのは、ワッツとシェルボーンの二人だが、シェルボーンは、内科医及びアイオワ女性医学協会の会長としてこのコンテストに科学的な基盤を与え、優生学記録局やアメリカ優生学協会（AES: American Eugenics Society）、大衆教育委員会（Popular Education Committee）や人種改良基金（Race Betterment Foundation）などの後援や資金提供を受けるために奔走した。一方、PTA理事であったワッツは、中産階級に対する宣伝役を引き受けた²¹⁾。

シェルボーンは、イェール大学の政治経済学教授であったアーヴィング・フィッシャー（Irving Fisher, 1867-1947）に向けた手紙の中で、ワッツの宣伝能力の高さを以下のように評価している。

もし、科学とワッツ夫人によって啓蒙された公衆との必要不可欠な結びつきがなければ、この運動は不可能であったでしょうし、またこの運動が生まれることすらなかったでしょう。彼女には洞察力があり、彼女が話すことが好きとやっているように、彼女は「（一般の人にも一引用者注）わかりやすい言葉で話す」のです²²⁾。

シェルボーンは、ワッツについて、ワッツが死去した1926年には、「ワッツ夫人は一致団結した預言者としての熱狂と素晴らしいセールスマンの自信を持ち合わせている」²³⁾とも評価している。

また、ワッツ自身も自身の役割について優生学記録局のダヴェンポートに向けて次のような手紙を送っている。

私共がこれらの博覧会でしていることが、全て真の意味で科学的である訳では無いと理解しています。しかし、私共は人々に考えさせることに成功しています。「馬に水を飲ませる前に人は水のあるところに馬を導かなければならない」ですし、これは、かいば桶に馬を連れて行く、よく知られた方法でもあります²⁴⁾。

ワッツは、自らの「ふさわしい家族」コンテストへの関与の方法について、「人が誇るべき健康の観点から作業をすすめている」と述べ、より良い植物品種や家畜の品種改良に取り組む農家を引き合いに出して、「では親たちに自分たちの良い家族である男の子や女の子を（他の人に一引用者注）見せる機会を作り、他の人々に対して彼らが生み出す子供の質を改良するよ

うに刺激をぜひ与えましょう」と呼びかけている²⁵⁾。

人間の（もしくは人種の）改良を動植物の品種改良と同列に述べるこの論調は、何もワッツに限ったものではない。マーガレット・サンガー（Margaret Higgins Sanger, 1879–1966）によって設立されたアメリカ産児制限協会も、1920年代を通して「サラブレッド人種を育成すること」をスローガンとして掲げていた²⁶⁾。そして第一回「ふさわしい家族」コンテストにおいても、コンテスト会場に掲げられたポスターの第一文は、「あなたはサラブレッド人間ですか？（Are You a Human Thoroughbred?）」で始まっている。

これら1920年代の「完全無欠の人間」に対する飽くなき追求の姿勢は、先述した通り、第一次世界大戦の経験に負うところが大きい。後段で詳述するが、キリスト教会もこれらの動きを「純潔な人間を生み出す」として容認しており、宗教学及び倫理学の研究者であるアーサー・W・スレートン（Arthur Wakefield Slaten, 1880–1944）も、人は「アメリカンビューティー種のバラや種無しオレンジ、モルガン種やクリスデール種の馬、エアシャー種やジャージー種の牛」と同様に「オリンピック・ゲームの優勝者や紳士、そして学者」を生み出すことができると論じている²⁷⁾。

第一回「ふさわしい家族」コンテストが全国的な注目を集めたことにより、このコンテストは、アメリカ各地の州または郡の博覧会で開催されるようになった。コンテストの各地への伝播及び大衆化により、家族の構成人数に即した部門数が追加され、また健康診断の内容も梅毒診断のためのワッセルマン検査や知能テストなどが、追加された。1924年12月31日付でワッツからダヴェンポートに送られた手紙のなかで、ワッツはこのコンテストの参加者たちの様子について次のように記述している。

（参加者たちは一引用者注）時間刻みのスケジュールで働く忙しい内科医と、一分たりとも休まずに働いても全ての参加者を捌き切れないであろう忠実な心理学者、医師たちの手伝いをする二、三名の学生看護師、午後と朝の各一時間で全ての参加者を網羅するために奮闘する地元のYMCAもしくはYWCAから派遣された指導者達、そして正確に捌くには二時間を要するコンテスト記録を、急かされた一人の歴史学者が20分で書き留めようとする一方で、これらの作業の書記部門を担い、（エントリーした人々の一引用者注）点数カードに（エントリーした人々の一引用者注）名前を埋めていこうとしている、二、三人の机に控えた不慣れた女性たち（によって評定され、コンテストが支えられていました一引用者注）²⁸⁾

このように慌ただしく、ともすれば乱雑なテイラー主義的判定方法によって、全ての参加者が各検査や家族の履歴などの項目についてAプラスからDマイナスまでの12段階に評価され、各項目でBプラス以上の評価が出された家族（ないしカップルや子供）に対してメダルが授

与された。メダルの色もオリンピック・ゲームのように評価によって色が違っており、各項目で全てB プラス以上の参加者には銅メダルが贈られた²⁹⁾。また、各項目でA プラス以上の参加者には金メダルが贈られた³⁰⁾。このメダルには「はい、私は上質の遺産を受け継いでいます (Yea, I Have A Goodly Heritage)」という文字が刻まれ、北方系の白人夫婦が男児にトーチを渡す絵が描かれていた (図1)³¹⁾。

更には、上位に入ったコンテスト参加者達には銀のトロフィーが授与され、地元紙は上位者の写真をトップ記事で掲載し、「優秀な家族」として報道した (図2)³²⁾。

以下、アメリカ各地で行われた「ふさわしい家族」コンテストについて、具体的な事例を挙げていく。

1924年のカンザス自由博覧会においては、小・中・大家族各部門の優勝者には、カンザス



図1 「ふさわしい家族」コンテストのメダル

メダルの画像は Selden, 32. より引用。



図2 トロフィーを持った「ふさわしい家族」コンテスト優勝家族

American Philosophical Society, AES, Am3,575.06,95., “Four Generations at Fitter Families Contest” (1923) 撮影した場所は不明。http://www.eugenicsarchive.org/html/eugenics/static/images/33.html (Retrieved on September 16, 2011)

州知事のジョナサン・デイヴィス (Jonathan M. Davis, 1871–1943) から「ふさわしい家族」知事トロフィーが贈られた。また、「A 評価の個々人」には、カンザス州選出の合衆国上院議員のアーサー・カップパー (Arthur Capper, 1865–1951) に因んだカップパー・メダルが贈られ、メダルには、古代ギリシャの衣服を思わせる透明な衣装を着た親が、彼らの(恐らく)優生学的に価値のある幼児に向けて腕を広げている像が刻印されていた。博覧会のパンフレットによれば、「このトロフィーとメダルは家畜競争やカンザス石油鉱井よりも価値があるものである。なぜならば、健康は財産であり、健全な肉体の中の健全な精神は人類の所有物の中で最も貴重なものであるからである」と記されていた³³⁾。

子供部門においては、知能テストだけでなく、精神的な外観、身長、歯科衛生、視覚および聴覚なども検査された。身長について例を挙げると、子供の身長に関しては、特定の年齢の子供の「通常の身長」が記されているヘイスティンクス年齢身長対応表が用いられ、その標準から身長が逸れている子供には低い点数が付けられた³⁴⁾。

「ふさわしい家族」コンテストは、1923年には、カンザス州以外にもジョージア、テキサスの各州の博覧会で行われ、1924年に行われた第33回博覧会国際協会年次会議において、ワッツは、「州立学校、州健康理事会、州立病院や地元の科学者、専門家、内科医からの積極的な協力を得ることができた」と述べている³⁵⁾。

翌1925年には、前述の州に加え、更にミシガン、マサチューセッツ、アーカンソー、オクラホマの各州でも「ふさわしい家族」コンテストが行われるようになり、「赤ちゃんコンクール」以上の盛り上がりを見せるようになった³⁶⁾。この背景には、後章で述べる各州や郡の博覧会でコンテストの隣に設置された「優生学ビルディング」との相乗効果もあった。

次に、「ふさわしい家族」コンテストの勝利者と敗者の事例を挙げていく。

テキサス州のロリンズ一家は、サンアントニオに住む7人家族であり、父親のオスカー・B・ロリンズ (Oscar B. Rollins, 生没年不詳) を家長として妻と5人の娘がいた。ロリンズ一家は、1925年に行われた「ふさわしい家族」コンテストで7つのメダルを獲得し、2年後の27年には、同様に7つのメダルを獲得し、テキサス州ウェイコで行われた「ふさわしい家族」コンテストでも優勝した。オスカー・ロリンズは、郡の博覧会で家畜を審査する郡の農業職員として働く傍ら、家族に命じて(おそらくテキサス州の各郡の)「ふさわしい家族」コンテストに出場させた(図3)。

図3の整然と並んで座っている家族の中で一番上に立っているのは、当時6歳だったグロリア・ロリンズ・フット (Gloria Rollins Hoot, b.1919) であり、彼女は、大衆文化研究者であるクリスティナ・コグデル (Christina Cogdell) に宛てた2003年8月4日付の手紙と「ブルマに囲まれた人生—自分の人生の手記 (“Life Amid the Bloomers — A Journal of my Life”）」の中で、当時のこと、自分の父親や「ふさわしい家族」コンテストでもらったメダルについて次のように述懐している。



American Philosophical Society. Noncommercial, educational use only.

図3 「ふさわしい家族」コンテスト優勝者のロリンズ一家

American Philosophical Society, AES, Am3,575.06,85, "Large family' winner, Fitter Families Contest," Texas State Fair (1925) <http://www.eugenicsarchive.org/eugenics/images/26.html> (Retrieved on September 16, 2011) 尚、この写真は当時アメリカ優生学協会の事務局長をしていたレオン・ホイットニー (Leon Whitney, b.1894) が撮影したものであるとコグデルは指摘している。Cogdell, 56.

直径2.5インチのメダルには、「神聖な(もしくは上等の)遺産」と表面に刻まれていて、裏面には、(私が思うに)交差した二本の小麦のさやが描かれていました。「ふさわしい家族」コンテストの時に撮影された何枚かの写真のポーズは、恐らく私の父が考えたものだと思います。父は運動能力に優れ、また詩を好む人でした。子供のころ、父は私に詩を覚えさせようといつも躍起になっていたのを思い出します。そして、私の両親は成功しようという強い意志を持ち競争心に溢れていたに違いありません³⁷⁾。

この手紙と手記から、コグデルは、彼らが身に着けているのが他のコンテスト優勝者とは違い、正装ではなく体にぴったり合った水着である点、及びこの写真が整然と家族の各人の身長に合わせて立つ位置が固定されている点に着目している。体にぴったりと合った水着は家族一人一人の体格が如実に表れるため、当時でも水着で写真に映ることは本人の整った体格を誇示する意味もあった。そして、その体格を維持するためには、運動をして競争心を持たなければならないだろう³⁸⁾。

図3の写真に現れた「整然さ」は父親であるオスカーの美的意識の表れである。また、図3のロリンズ一家の並び方は小麦の穂を想起させる。当時のアメリカの農業界では小麦の品種改良が盛んであり、翻ってこの品種改良は、優生学者にとっては、人種改良に結び付ける格好の

暗喩である。また、メダルに描かれたような「二本の交差した小麦のさや」は、恵まれた優性種同士の遺伝交配を、人種の純血性や「似た者同士が結びつく」ということとも併せて示している³⁹⁾。

図3の写真で、ロリンズ一家は身長順に二列に分かれて座り、頂点に最も若いグロリアが立つことによって、まるで一家全体が一房の小麦の穂のような外観を与えている。恐らく父親のオスカーは、美的に均整のとれた構図を追及していたのと同時に、郡の農業職員という立場から小麦の品種改良についても知識があり「我々は優秀な『品種』である」というメッセージをこの写真に込めたかったのではないだろうか。

一方、1928年にミシガン州で開かれた「ふさわしい家族」コンテストに参加した33歳の匿名の女性は、総合でBマイナスの評価をつけられ、このコンテストには不適格とされた。

この女性の「ふさわしい家族」コンテストの検査点数表によれば、この女性は高校を卒業し、医科助手として働いており、既婚で6回の妊娠期間中5回を臨月で安産していた。少しばかりの貧血症があり、メソヂスト派教会に属し、政治団体への所属は無い。コーヒーよりももっと水を飲むようにとの忠告を受け、診察した医師は彼女の優生学的個人評価をBプラスとした。

しかし、彼女には虫歯があり、尿のなかにインドール（試薬の一種で悪臭がある）の痕跡がある、という二つの点で、彼女はBマイナスの評価を下され、「Bよりも低い評価（Bマイナスも含む）が一つでもあれば『ふさわしい』家族の資格は無い」とする評価基準によって、「不適格者」の烙印を押されてしまった⁴⁰⁾。

この女性について、歴史学者のスティーヴン・セルデン（Steven Selden）は、「33歳で5人の子供を育てている専業主婦にとって、自分の健康に気を配るだけの経済的な余裕も時間的な余裕もなかったという事象だろう。ここで重要なのは、彼女は遺伝子によって勝者の輪の中に入れなかったのではない。彼女は経済的地位によって勝者となることを否定されたのだ」と述べている⁴¹⁾。「ふさわしい家族」コンテストは、身体的に健康なだけではなく、経済的にも裕福で時間的な余裕がある人々、ないし家族が自己の正当性を確認するために、用意されたイベントだったのだ。

つまり、「ふさわしい家族」コンテストは、最初から社会的なバイアスが掛かった催し物であり、地方の名士など「元々社会的に高い立場にある人や家族」が勝者として地方社会に自らが君臨する理由付けを更に強めるためのものだったと言えよう⁴²⁾。

5. 博覧会の中の「優生学ビルディング」

優生学が大衆の人気を得た背景には、前章で述べたように、優生学の専門用語を「わかりやすい言語」に置換して大衆の前で話すことができるワッツのような女性が存在したことだけで

はなかった。

アメリカの博覧会の歴史研究の泰斗であるロバート・W・ライデル (Robert W. Rydell) は、「優生学者は、初期の博覧会における人類学者のように、自分たちの人種改良の議題を広めるために理想的に適しているものとして展示媒体に目を向けていた」と述べ、すでに1915年のサンフランシスコ・パナマ太平洋国際博覧会において、アメリカの展覧会文化の中に優生学を広めるための展示物があったことを指摘している⁴³⁾。

第一次世界大戦後になると、優生学者達は、ニューヨークにあるアメリカ自然史博物館で開かれた国際優生学会議との連携を深め、主要な展示物を形作っていった。この時期に作られた展示物が、1920年代には全国的に州や郡の博覧会での恒例催事物となった。1940年のニューヨーク世界博覧会では、「典型的なアメリカの家族」という展示の中に人種改良の概念を織り込むことに成功している⁴⁴⁾。

スミソニアン博物館の準秘書官であったジョージ・ブラウン・グード (George Brown Goode, 1851-1896) は、近代社会と視覚について次のような見解を残している。

この忙しい、重大でまた懐疑的な時代に、各人はすべてのものを知ろうと追求している。そして、人生は多くの言葉の前にあまりに短い。目はますます多く使われ、耳を使う機会はますます少なくなっている。目を使うということにおいて、叙述された書き物は絵や写真にその立場を譲っている。そしてやっと順番が回ってきた絵は実際の物に場所を譲っている。(中略) 公衆に対する講演者は自分の言葉を強調するために立体幻灯機を使い、編集者は昔の人々が必要だと思っていたものよりも100倍多く詳細な彫刻画を雑誌に挿絵として入れている。そして商人や製造業者は自社製品を、鮮明な絵グラフによって(顧客に一引用者注) 勧めている。古き時代の地方の展示会は偉大な博覧会となったのだ⁴⁵⁾。

博覧会が「実際の物体を用いて教授すること」を称揚する時代において、「視覚的な証拠」は、博覧会に権威を与え、しばしば「世界の大学」のように見なされるようになった、とライデルは、グードの「視覚の権威化」をまとめている⁴⁶⁾。

優生学者が注目したのは、まさにこの点であり、博覧会に来るような中産階級以上のアメリカ生まれの白人市民に展示品や野外劇を用いて人種改良という概念について視覚的な具体例を提供した。ライデルは「博覧会という文脈において、優生学者は興行師になったのだ」と述べている。

「視覚の権威化」が起こった両大戦間期の潮流に、優生学は上手く乗った形になったのだが、これを「ふさわしい家族」コンテストの主催者であるワッツとシェルボーンは鋭く捉えていた。1920年のカンザス州自由博覧会において、第一回「ふさわしい家族」コンテストが行われる傍らで、コンテストの審査や数値の集計が行われた建物の隣には、「優生学ビルディング

グ」としました(引用者注)。訪問者に加え5~6人の子供と多くの大人が収容でき、ざわざわと話し声が聞こえる待合室の横にあるトレッセルの上で机が大きな掲示板になっていました⁴⁷⁾。

そして一旦中に入ると、観覧者たちは、家族の健康についての情報を面白おかしく伝えるチョーチョー健康ピエロ(Cho-Cho the Health Clown)を含む「優生学ビルディング」のスタッフを見つけた⁴⁸⁾。大抵の「優生学ビルディング」の観覧者は、「ふさわしい家族」コンテストの参加者でもあったため、診断及び採点結果を待つための場所として「優生学ビルディング」が作られた。待ち時間の間、参加した家族たちは優生学的な適合性について「他愛もない会話」を他の参加者と交わした。ここに至って「優生学ビルディング」は、「学術専門知識の展示」というよりは、「大衆に楽しんでもらう見世物」の性格が色濃かったことが判る。「優生学ビルディング」では、子供たちが健康ピエロと遊び、若いカップルは「生まれてくる子供や自分に対してこのような家族とならねばならない」と自分達の将来像を描き、夫婦は「自分の子供にどのような相手がふさわしいか」を考えた。現在アメリカ各地にあるテーマパークのような要素が既にこのビルディングに備わっていたとも考えることができるだろう。

「優生学ビルディング」の中の説明パネルや道具は、ひとまとめにされ、依頼のあった州や郡の博覧会に送られた。1926年にワッツの委員会は、これらの展示品をフィラデルフィア15周年記念国際博覧会に送っている。1920年代半ばまでには、ワッツの委員会はトラックで輸送できる移動式展示を整理し、地方の優生学委員会はテントの下でこれらのものを観覧客に見せた。こうしたコンパクトにまとめられた優生学展示品のお蔭で、この頃には、「人種改良」というイデオロギーは専門家だけのものでなく、各家庭にまで広がっていった⁴⁹⁾。

この優生学や人種改良イデオロギーの広汎な伝播について、ワッツと共に「優生学ビルディング」の設立に関わったシェルボーンは次のように述べている。

(博覧会関係者だけでなく(引用者注)アメリカ中の科学的な団体は、この優生学教育セットを慎重に、あまり争うことなく、好きな時期に好きな場所で使い始めるようになった。知性的な家族は、この(「ふさわしい家族」コンテストの点数表(引用者注))を使い、各家族がすべきことを決める権威的な人物を探すようになったとも感じている。(中略)結局のところ、この運動は、家族が有機的な人種や社会の単位として強められるのに大きく寄与するまでになったのだ⁵⁰⁾。

次に示す図は各地で開かれた博覧会の「優生学ビルディング」で広く用いられたパネルである。正確には、このパネルは、「ふさわしい家族」コンテスト会場で使われていたものであるが、前掲の図4のように、「優生学ビルディング」と「ふさわしい家族」コンテストのための用具

はセットで各地に送られたことから、これが「優生学ビルディング」の展示と考えることも可能であろう。

この図のパネルは五種類の小パネルと電球が配置されている。上部に設置された電球は、15秒ごとに光り、「この15秒であなたの財産のうちの100ドルが精神異常者・精神薄弱者や犯罪者などの悪い遺伝を持った人のために使われています」と社会的不適格者への「無駄な支出」を警告する意味がある。

下部に設置された四つのパネルは、右半分が「アメリカが必要としている人々」であり、左半分が「アメリカには不要・断絶すべき人々」だと説明されている。右から二番目に設置された電球は16秒ごとに光り、これはアメリカ国内では16秒ごとに人口が一人増加していることを示している。一番右に設置された電球は7分30秒ごとにしか光らず、これは「指導者となるべく高い資質をもった社会的適合者は7分30秒ごとにしか生まれえない。アメリカ人の4%しかこの中には入っていない」と上部のパネルとの差を際立たせている。

左半分の二種類の小パネルのうち、左端の電球は48秒ごとに点灯し「48秒ごとに通常の人の子の8歳児の年齢にすら到達しない人が生まれて」おり、左から二番目の電球は50秒ごとに点灯し「50秒ごとに人が一人刑務所に入っている。『普通の』人であれば、刑務所などには行きません」と警告している。

そして左上には、この「悪い遺伝」について警告するような「他の人々にとって足枷となるような人々が生まれています」と書かれている。この短文から「刑務所に行くような罪人は悪い（普通でない）遺伝を持ったアメリカに不要な人物」である、と観覧者は展示者の意図を受け取っているのだ。

実際にこれらの展示と向き合った観覧者は、頻繁に点灯する左下半分の「アメリカには不要



American Philosophical Society. Noncommercial, educational use only

図5 「アメリカが必要とする遺伝」パネル

American Philosophical Society, AES, Am3,575.06,44, “Flashing light exhibit at Fitter Families Contests,” 1926. <http://www.eugenicsarchive.org/html/eugenics/static/images/5.html> (Retrieved on September 17, 2011)

な人達」の電球を見てから一向に点灯することの無い一番右の電球に目を向け、いかにアメリカの中で不適格者が「点灯するように」じわじわと増えているかという恐怖を植え付けられたことだろう。

このように、「ふさわしい家族」コンテストに参加する傍ら、観覧者として家族たちは、「優生学ビルディング」の様々な展示物を見ることによって、自らが社会の貢献者として「普通の人々」であり続けるためには何をなさなければいけないのか、というイデオロギーに触れていた。コンテストに入賞した人々は、勝者として自分たちは現在の状態を維持しなければならない、という観念に囚われ、また落選した人々は、自分たちに何が足りなかったのか、そして、「普通」に戻るためには何に気を付けなければいけないのか、脅迫のようなメッセージを浴びせかけられたのだった。

6. 優生学説法コンテスト

以上で述べたように、優生学は両大戦間期を通じて大衆化していったが、優生学に反対する立場の人々も少なくなかった。

一つはローマ・カトリック教会であり、教義的に墮胎は許されざるものという姿勢は現在も変わってはいない。両大戦間期においても、例えばコロラド州では1927年に断種法が通過したが、1910年に断種法案が州議会で現れるや、カトリック系ロビー団体は、強硬にこの断種法に反対し、断種法が実際に通過した後も州知事にこの法案に対する拒否権を行使するように訴えている。カトリック教徒たちは、カトリック系の雑誌を通じてニューヨークやコネティカットなど各州の断種法案に反対するように呼びかけている⁵¹⁾。

一方でカトリックの総本山のヴァティカンは、優生学の存在について、ローマ法王ピウス11世のもと、結婚と出産は聖なる義務であり権利であると断った上で「政治執行者は臣民の身体に対して、直接権力を行使しない。それ故に、そこでは何の罪も起きないし、重大な刑罰が起きる理由もない。政治執行者は、優生学やその他の理由で、直接的な害を加えたり、身体統合に手を加えたりすることは、決してない」⁵²⁾ という見解を出している。

もう一つはキリスト教原理主義である。1925年にテネシー州で決議が出たスコープス裁判で、アメリカの、特に南部の州で、進化論を教育機関で教えることを禁じた法律が制定されていった。優生学は進化論から枝分かれした学問的背景を持つ以上、キリスト教の原典である聖書に優生学が背いているのではないか、という疑問は、原理主義者の中では共通の見解だった。

こうした見方に対して、ダヴェンポートをはじめとするアメリカ優生学協会の会員たちは、1926年に『優生学教理問答 (*Eugenics Catechism*)』というパンフレットを発行して次のように「優生学はキリスト教教理に反するものではない」と訴えている。

問：優生学は聖書に反していますか？

答：聖書は優生学と大いに関係があります。聖書は人間にサンザシからブドウは、アザミからイチジクは採れないと教えてくれます。

問：優生学は不幸な人々に同情しないという意味ですか？

答：同情しないという意味ではありません。避けられない不幸な人々により十分かつ効果的に広がるべき同情を区分することで避けられない不幸な人々をより少なくしようという意味です。(中略) 非難される遺伝が出現する場合を防ぐという効果があります⁵³⁾。

スコープス裁判は、被告であるスコープス側に罰金が科せられる判決が出た一方で、原告である検察側にヤハヴェが実際に6日間で世界を創造したわけではないかも知れないと認めさせたことから、進化論は実質的な勝利を得た。アメリカ中が注目した裁判におけるこの結果により、進化論はますます多くの大衆に事実として受け入れられることとなった⁵⁴⁾。

このパンフレットの他に、優生学協会が後援した事業が「優生学説法コンテスト」だった。1926年に開催された第一回コンテストでは、参加者のうち第一位に500ドル、二位に300ドル、三位に200ドルの賞金が与えられた。ニューヘブンのカルバリー・バプティスト教会の助祭でイェール大学の文芸評論家のウィリアム・リオン・フェルプス (William Lyon Phelps, 1865–1943) がダヴェンポートなどと共にコンテストの審査員をし、アメリカ中の聖職者からおよそ300の説法が提出された。

このコンテストで第二位に選ばれたケネス・C・マッカーサー師 (The Reverend Dr. Kenneth C. MacArthur, 生没年不詳) は、1924年の東部州博覧会で行われた「ふさわしい家族」コンテストで優勝し、銀のトロフィーを獲得している⁵⁵⁾。

科学者だけでなく、聖職者が一般の人々に向けて「劣等な血を混ぜて我々の品格を落とすことは許してはならない」⁵⁶⁾と説いたことは建国以来キリスト教と切っても切り離せない歴史を持つアメリカ人に深い影響を与えたと考えることができる。

7. おわりに—「ふさわしい」家族コンテストと進歩主義時代

以上に述べたことから、「赤ちゃんコンクール」及びその発展形としての「ふさわしい家族」コンテストには二つの特徴を見つけることができる。

一つはこれらのコンテストが主として女性によって主催され、女性誌がコンテストを協賛していたということである。これについては、ブルーニウスが指摘しているように、彼女たちは、進歩主義時代の女性指導者として、優生学を「伝統的な結婚の慣習の障壁を破り、改革に対する自分たちの努力の科学的な根拠を与える解放のメッセージ」と考えていた⁵⁷⁾。優生学の導入によって伝統的な結婚観を覆し、「科学的かつ進歩的」な優生学理論に従った結婚形態が子供

にとっても、また子供を持つ母親にとっても有り得べきで、これは演繹して考えれば、優生学運動という社会運動が家庭という「聖なる領域」に浸透し始めた証左ともなろう。夫婦は個々人の結びつきではなく、地域、ひいては国家社会の最小単位と考えられ始めたのが進歩主義時代の特徴である。

この優生学運動の女性の間での浸透に大きく寄与したのが、第一次世界大戦である。それまで、アメリカ合衆国はモンロー主義に基づき、ヨーロッパ諸国の戦争には不介入の姿勢を取っていた。しかし、第一次世界大戦に参戦することによって、アメリカ合衆国は、国力の殆どを戦争に傾注する総力戦体制に移行することになった。総力戦で重視されるのは、個々の兵士の戦闘能力、ひいては運動能力である。当時、兵士は男性のみで構成されていたため、各国の兵力は、そのまま、その国の男子の基礎能力を示す指標ともなった。

このような状況の中、女性は「産む性」及び「育てる性」としての役割を強調された。図1で表したように、「ふさわしい家族」コンテストの優秀者に与えられたメダルで、両親からトーチを受け取っているのは男児である。つまり、女性は「良い男児を産み、育てる」ことによって、優生学的に「ふさわしい家族」と認められることに加え、「ふさわしい母親」の称号を得ることができた。アメリカの顔とも言えるアメリカ軍の兵士に、運動能力や体格、知性に優れた男子を送り出すことは、アメリカの母親として、名誉であり、また、当然の義務でもあった。進歩主義時代は、この義務を果たすために、女子教育が行われ、また、女性の社会運動が認められた。優生学にせよ、産児制限にせよ、女性は一個人というよりは、「産む性」「育てる性」としての優秀さを、実際に「優生学的に優れた子供の出産」や、「将来、社会に大きく貢献できる子供の養育」で示すことによって、アイデンティティを確立していった。

優秀な男児を将来のアメリカ代表として戦場に送り出し、勝利を取めるために、そして、優秀な女児を将来の良き男児を育てる良き母にするために、優秀な母親が必要とされた。それまでは厳格な家父長制の下、夫ないし父が決定したことには従わねばならなかった。しかし、総力戦である第一次世界大戦への参戦で、アメリカ合衆国の国力を世界中に示威する必要に迫られる段になって、女性の「産む性」「育てる性」が重視されるようになった。主に子育ての側面で、女性の社会運動への参加は積極的に奨励され、女性は家庭という枠を飛び出し、地域社会、アメリカ合衆国という国家に対し、優秀な兵士の供給者としての発言権を得ることが可能になった。そして、第一次世界大戦での勝利によって、アメリカ兵の優秀性は保証され、アメリカ兵達の養育に深く関わったアメリカの女性達は、新たなアイデンティティを得たと言えよう。

もう一つは、上述した「赤ちゃんコンクール」を支えた活動家達が北東部の都市部ではなく、ルイジアナ、アイオワ、オハイオ、コロラドといった「非北東部地域」で活動していたという地理的特徴である。

ここから考えられるのは、当時の時代背景だろう。北東部の大都市では、ニューヨークのエ

リス島を始め多くの移民船が毎日のように東部および南部ヨーロッパからの「新移民」を運んで到着していた。新移民が「劣等人種」として優生学の名の下にラベル付けされたのはこの進歩主義時代である。

北東部の大都市の知識人が優生学を扱う際に先ず考えたのは、目の前にスラム街を作って「都市を劣化」させている新移民たちの存在だろう。こうした社会問題の優生学的解決として知識人が取り上げたのは「拒否的優生学」であり、多産な新移民を断種することによって社会の改革が行われうると考えられた。

しかるに、「赤ちゃんコンクール」や「ふさわしい家族」コンテストが行われた上述の諸州は、毎日爆発的に増える新移民の存在は北東部に比べ薄く、また、「アメリカの理想的な人種」であるアングロ＝サクソン系の旧移民が人口比率的にも、また社会的地位の面でも指導者として活動しやすかった。北東部から段階的に旧移民が移動していった歴史を考えると、進歩主義時代は「その土地生まれの」アングロ＝サクソン系の白人住民がちょうど3～4世代目を築いて地域社会に根付いた頃である。

また、これらの州には、まだこの時期は、北東部の大都市のようなスラム街の問題が顕在化しておらず、人口密度もまばらで、白人住民にとっては「適度な対人間距離」を取って住める素地が出来ていた。機械化も鉄道路線に沿って漸次的に進み、家事労働の時間が削減された結果、その土地生まれの白人女性住民たちがより良い地域社会を目指して活動するための時間的余裕が生まれたとも言えよう。

上記二つの特徴から、「赤ちゃんコンクール」や「ふさわしい家族」コンテストは積極的優生学が「地方」の各州で受容されていった一つの典型例と考えられる⁵⁸⁾。

これら二つのコンテストが優生学運動と深く結びついていたことは、同時に人種主義及びネイティヴィズムの高揚がアメリカ国内で起きていた事実とも関係している。1915年に公開されたD・W・グリフィス (David Ward Griffith, 1875–1948) 監督作品の『国民の創生 (*The Birth of a Nation*)』は、黒人が「墮落した」政治を展開し、白人少女をレイプしようとするのを「ホワイト・ナイト」であるクー・クラックス・クラン (KKK: Ku Klux Klan) が阻止した、という粗筋は当時のネイティヴィズムに火を点けた映画である。これにより第二次KKKが各地で組織されたが、KKKの黒人及び移民排斥運動が盛んだった地域は、テキサス・オクラホマ・インディアナ・オレゴンなどで、先述した「赤ちゃんコンクール」が初期に開催された地域に近接している。インディアナ州に至っては「赤ちゃん事務局」の創立者であるデ・ヴィルビスの故郷であり、社会促進活動専門家のエリザベス・タイラー (Elizabeth Tyler, 生没年不詳) がクランの会員として主な活動基盤とした場所であった。タイラーは、1910年代初頭に「良い赤ちゃん運動 (better babies movement)」を始め、1925年にインディアナ州ココモで行われた「赤ちゃんコンクール」を含め、1920年代には各所でクラン主催の「赤ちゃんコンクール」を開くのに助力した⁵⁹⁾。

このように、優生学運動は当時の白人至上主義運動とも深く結びついており、「赤ちゃんコンクール」及び「ふさわしい家族」コンテストはその娯楽イベント的な名前とは裏腹に、家族や子供の肌の色・体格・健康状態を以て全ての優劣が決定されるという性格を備えていたと言える。

注

- 1) アメリカ合衆国以外の国の拒否的優生学についての事例は次の著書を参照されたい。米本昌平・松原洋子・櫛島次郎・市野川容孝『優生学と人間社会—生命科学の世紀はどこへ向かうのか—』（講談社現代新書、2000年）
- 2) Negative Eugenics については「消極的優生学」という翻訳が大勢を占めているが、断種や移民制限といった要素を根幹とするこの優生学はある種の攻撃的な積極性があると筆者は考えるため、ここでは敢えて「拒否的優生学」と記すこととした。米本・松原・櫛島・市野川、34.
- 3) 米本・松原・櫛島・市野川、46.
- 4) 小野直子「生殖の権利と社会福祉—断種におけるインフォームド・コンセント—」『アメリカ研究』第45号（2011年3月）、5.
- 5) Rebecca M. Kluchin, *Fit to Be Tied: Sterilization and Reproductive Rights in America, 1950–1980* (New Brunswick, N. J., and London: Rutgers University Press, 2009), 200–208.
- 6) 但し、憲法修正第19条が通過し、女性参政権が認められた1920年代以降を「進歩主義時代」に含めない研究者も多い。
- 7) Ruth Clifford Engs, *The Eugenics Movement: An Encyclopedia* (Westport, Connecticut and London: Greenwood Press, 2005), 19.
- 8) 米本・松原・櫛島・市野川、20.
- 9) Engs, 19–20.
- 10) Engs, 20.
- 11) 「赤ちゃんコンクール」は他の女性向け大衆雑誌でも取り上げられた。例としてはGeorge E. Dawson, “100 Super-fine Babies: What the Science of Eugenics Found in the Babies of Our Contest,” *Good Housekeeping*, February 1912, 238–41.
- 12) Engs, 42.
- 13) *Greeley Daily Tribune*, September 30, 1910, 2., and October 2, 1910, 3.
- 14) *Denver Medical Times*, vol. 32, no. 10 (April 1913), 448; *Denver Daily News*, May 1, 1913, 1. and May 2, 1913, 1. 引用した見出しは5月1日号の第一面から。
- 15) Harry Bruinius, *Better for All the World: The Secret History of Forced Sterilization and America’s Quest for Racial Purity* (New York: Random House, Inc., 2006), 335.
- 16) *History of Audubon, Iowa, 1878–1978* (n.p., 1978) 79–80.
- 17) Mary T. Watts, “Fitter Families,” *The Survey* 51 (February 15, 1924) 517–518.
- 18) Engs, 78.
- 19) “Fitter Family Contests,” *Eugenic Archive*, <http://www.eugenicsarchive.org/html/eugenics/static/themes/8.html> (Retrieved on September 14, 2011) 尚、このウェブアーカイブによればカップル部門は1925年には始まっている。男児部門、女児部門についてはL・S・ウェストの以下の史料に写真入りで記述がある。L.S. West, “The Practical Application of Eugenic Principles,” in C.C. Little Ed., *Official Proceedings, Vol. III: Proceedings of the Third National Conference on Race Betterment* (Battle Creek, MI: The Race Betterment Foundation, 1928), 91–117.
- 20) 具体的に開始された年月の記載はないが、「カップル部門」と「男児部門」、「女児部門」があったことは以下の文献で指摘されている。Facing History and Ourselves, *Race and Membership in American History: The Eugenics Movement* (Brookline, Ma: Facing History and Ourselves Foundation), 143. 「独身男性部門」と「独身女性部門」の存在については後述する1924年11月6日付のジョージア州サヴェンナの地元紙 *The Savannah Press* の紙面で明らかにされている。(注42参照)

- 21) スティーヴン・シェルデン (Steven Selden) は「1920年代にオクラホマ, ニューヨーク, カンザス, アーカンソー, マサチューセッツ, ミシガン, ジョージア, テキサスの各州の博覧会で『ふさわしい家族』コンテストは大衆教育委員会によって資金的な後援を受け」た, と述べたうえで, 「これらのコンテストは(大恐慌による一引用者注) 経済状況の悪化を受けて資金後援は人種改良基金に移管された」と述べている。Steven Selden, *Inheriting Shame: The Story of Eugenics and Racism in America* (New York and London: Teachers College Press, Columbia University, 1999), 30.
- 22) Letter from Sherborn to Fisher, December 9, 1924, in the Davenport Papers, American Philosophical Society Library, Philadelphia, Pa.
- 23) Florence B. Sherbon, “Fitter Families and Psychological Tests,” *Science — Supplement* n.s. 63 (January 29, 1926), 32–34.
- 24) Letter from Watts to Davenport, August 14, 1923, in the Davenport Papers, American Philosophical Society Library, “Mary T. Watts” file. Philadelphia, Pa.
- 25) Watts, 518.
- 26) Christina Cogdell, *Eugenic Design: Streamlining America in the 1930s* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2004), 152.
- 27) A. Wakefield Slaten, “Sermon 25,” *American Eugenics Society Papers, 1916–1973* (Microfilm)
- 28) Letter from Watts to Davenport, December 31, 1924, in the Davenport Papers, American Philosophical Society Library, Philadelphia, Pa.
- 29) Engs, 78.
- 30) Daniel J. Kelves, *In the Name of Eugenics: Genetics and the Uses of Human Heredity* (Cambridge and London: Harvard University Press, 1985) 61–62.
- 31) このメダルのデザインについてはコグデルが「メダルのデザインの選定段階ではギリシャ古典風の衣装を纏った北方系の白人夫婦が水入れのピッチャーを持って(立っていて—引用者注) 彼らの子供である男児が手にしているボウルに水を注ぐ」という「生命の流れ」を暗喩したものが作られたが「ヘンリー・F・オズボーンが『女性から生み出された目的が決して明らかになっていない』との理由で『生命の流れ』デザインから, 夫婦が地面に跪いて男児に勝利のトーチを渡すものに変えられた」と指摘している。(Cogdell, 56.) なお, 初期のデザインの彫像案は同58ページに掲載されている。
- 32) Cogdell, 56.
- 33) Kelves, 62.
- 34) Facing History and Ourselves, 143.
- 35) *Thirty-Third Annual Convention of the International Association of Fairs and Expositions* (Sioux City, Iowa: Deitch and Lamar, n.d.), 66–70.
- 36) Rydell, 53.
- 37) Letter to Cogdell by Gloria Rollins Hoot, August 4, 2003, and Hoot, “Life Amid the Bloomers — A Journal of my Life”
- 38) Cogdell, 58.
- 39) Cogdell, 254–255.
- 40) Selden, 30–32.
- 41) Selden, 33.
- 42) 1924年11月6日付の *The Savannah Press* 紙はトップ記事で「ふさわしい家族」コンテストの勝者のニュースを報道しているが, 優勝者となったのはジェイムズ・A・ケリー (James A. Kelley) という小学校の校長の一家であった記されている。 *The Savannah Press*, November 6, 1924, 1. 尚, この地元紙は以下のウェブサイトより参照できる。American Philosophical Society, ERO, MSC77, SerVI, Box 4, FF Studies, KS Free Fair, “School Principal and Family Take Fair Top Honors,” <http://www.eugenicsarchive.org/html/eugenics/static/images/199.html> (Retrieved on September 16, 2011) この記事によれば, ケリーの妻も学校の教師をしており, 経済的な基盤は十分にあることが伺える。
- 43) Rydell, 39.
- 44) 勿論, 生物学者の中には既に1930年代からメンデル遺伝の単純性を疑問視し, 優生学者の運動を「科

学的」というよりは「プロパガンダ」だと批判する人々も多かった。

- 45) George Brown Goode, “The Museums of the Future,” in *Annual Report of the United States National Museum: Year Ending June 30, 1897* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1898), 243–262.
- 46) Rydell, 40.
- 47) Letter to Davenport by Watts, December 31, 1924.
- 48) Rydell, 51.
- 49) Rydell, 53.
- 50) Sherbon, “Popular Education,” *Eugenics* 3 (September 1930), 356–357.
- 51) Bruinius, 230.
- 52) *Five Great Encyclicals* (New York: Paulist Press, 1939), 96.
- 53) *A Eugenics Catechism*, American Eugenics Society, Inc., 1926. より抜粋。全文は以下のウェブサイトで見覧可能。“Eugenics: A Documentary History,” University of Vermont, <http://www.uvm.edu/~eugenics/primarydocs/oraesec000026.xml> (Retrieved on September 17, 2011)
- 54) Bruinius, 233.
- 55) Bruinius, 234–235.
- 56) The American Eugenics Society Papers, Boxes 11 and 14, at the American Philosophical Society Library.
- 57) Bruinius, 235–236.
- 58) ロバート・ライデル (Robert W. Rydell) は1914年にはミシガン州バトル・クリークで第一回全国人種改良会議が開かれたことも指摘している。Robert W. Rydell, *World of Fairs: The Century-of-Progress Expositions* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1993) 40.
- 59) Kathleen M. Blee, *Women of the Klan: Racism and Gender in the 1920s* (Berkeley: University of California Press, 1991) 20.

Eugenic Movement and “Fitter Families” Contests in the Period between the Great Wars in the United States

Megumi OGURA

Abstract

Eugenic movement has become popular in the period between the Great Wars. “Better Baby Contests” and following “Fitter Family” contests are the typical events reflecting popularization. These contests were frequently held at many state or county fairs in the United States. This was owed to technological development which was able to produce more visual and “understandable” exhibits; plus, these contests were supported by local women who have gained their own identities by joining eugenic movement.

Keywords: the United States’ cultural history between the Great Wars, eugenic movement, “Better Baby Contests,” “Fitter Families” contests, the Progressive Era